

「心の旅」No.1 -4-

エツケル先生に対するわたしの答え 1986年8月11日(月)第1日

ところで、私は、かつて「信仰」について、絶望を体験し、その部屋をとおりぬけた。
今私にとって「信仰」—それは私には究極的に第二義に位置する。
私にとって第一に来るもの、一番大事なこと。それは、究極においてその「信仰」をさえ支えているところのもの、私に信仰を起し、信仰を支え、信仰を全うさせるところのもの。
それは、究極絶対の「神の恩寵」である。そこからのみ信仰が成立するところ、そこに私の究極的な関心がある。

わたしは信仰に絶望したことを忘れることは出来ない。
信じること、それが、あれか—これかを選び決断するという意志的なものであれば—そういうように論じられた時代もあった—そうであるならば、私は自分の意志的信仰の弱さの故に、全き無力の故に、意志の不確実、あてに出来ない弱さ—そこに潜む絶望、虚無、深い淵の中にいる、そのような人々の間を、私は通った。そして私はこの部屋を抜け出た。再びそこに戻りたくない。

いま私がいる部屋は信仰に先立つ神の絶対恩寵が満ちている所であり、わたしのささやかな、消えいような信仰、それを消すことなく支えて下さるところの、先立つ恩寵である。

私を越えたもの、私には全くないもの。そこに支えられている以上、私は自分の信仰を頼りにすることはできない。この意味で私は自分の信仰をさえ捨てた。全き全能の主なる神の恩寵に身を委せる他に道は無いという信仰に達したのである。この部屋はあの部屋と通じている、しかし、私はあの部屋には戻らない。

私は捨てた。全てを捨てた。

だから今あるものは、全てその後から来たもの。全てはわたしにとって、新しい。わたしの力で得たのではなく、新しく与えられたもの。恩寵である。だからわたしはうれしい。みんなみんなありがとう。このように私の心は歌っています。

ミニチャペル Parousia 4月4日 記載